

「尹東柱没後 80 年、詩碑建立 30 周年 尹東柱追悼式」第 2 部 講演会

2025 年 2 月 16 日

## 尹東柱を語る

同志社大学学長 小原克博

尹東柱の生涯とそれに連なる「歴史」(戦争や良心概念等)、尹東柱の詩とそれに連なる「世界」(響き合う詩の世界)を語る。それによって、尹東柱を一つの起点とする新しい「文化」を構想する。

### 1. はじめに——同志社大学と韓国の関係

#### 1) 教育

同志社大学は韓国から 461 名の留学生を受け入れている。本学の留学生総数 1375 名の 33.5%を韓国人学生が占めており、国別でトップになっている。韓国における協定校は、延世大学を筆頭に 10 校あり、教育面での交流の基盤となっている。

#### 2) 研究

研究面では、同志社コリア研究センターを中心に活発な研究活動がなされている。韓国と日本の研究者の間の交流にとどまらず、同センターは国際的な連携も進めている。たとえば、本学のパートナー大学であるドイツ・テュービンゲン大学で、コリア研究のワークショップが開催されている。

#### 3) 尹東柱の詩碑建立

尹東柱の没後 50 周年の 1995 年、尹東柱の詩碑建立に同志社が協力をした。尹東柱の詩碑建立の運動は「同志社校友会コリアクラブ」(現在の「同志社コリア同窓会」)「尹東柱を偲ぶ会」が中心になって展開され、その切実な願いを、当時の同志社総長、同志社理事長、同志社大学長が受け入れた。詩碑建立は、韓日関係の新たな時代を象徴するものとして大きく報道された。

### 2. 尹東柱と私

私が韓国に初めて行ったのは、ソウルオリンピック(1988 年)直後の頃で、オリンピックを期に韓国社会が大きく変わろうとしているのを感じた。同志社大学大学院神学研究科に在学中に、韓国から来られ、韓日の基督教の歴史を研究されていた趙載国氏と出会い、韓国への関心も高まっていった。趙載国氏は後に延世大学教授となり、今に至るまでお世話になっている。学生時代には 2 年間、コリア語を勉強した。

1996 年から同志社大学神学部で教鞭を執るようになってから、日本基督教史を専門とする同僚の原誠教授を通じて、韓国や尹東柱に対する学問的関心を深めていった。原教授は韓日関係

の歴史に詳しい方であった。私は、原教授や学生たちと共に韓国スタディツアーに数年続けて参加し、毎回、延世大学で尹東柱の詩碑や記念館を訪ねることができた。こうした経験もあって、尹東柱のことを同志社大学の学生に広く伝えたいと願い、授業の中で尹東柱を紹介してきた。

2024年4月に学長に就任し、5月に立教大学との相互協力・連携に関する協定を締結した。立教大学総長の西原廉太先生はキリスト教を専門とし、韓国および尹東柱についても深い知見を持っており、二人の話題はおのずと、両大学をつなぐ人物である尹東柱に向かった。また、尹東柱が関係する延世大学・立教大学・同志社大学で何かできないだろうかという話もしてきた。

### 3. 戦争と私——尹東柱を語る背景

#### 1) 個人的な経験

ヒロシマ原爆体験の語り部であった祖父(小原好隆)から多くの話を聞き、影響を受けた。以下、小原好隆「小さな島の大きな悲劇」(竹内良男編『凍りついた夏の記憶——ヒロシマ・50年目の証言』雲母書房、1995年、69-123頁)より引用。

たくさんの人たちが、肉親を捜して毎日島を訪れていた。

親たちが探しに来るのを待ちながら、親に会うこともできないまま多くの子どもたちが死んでいった。ある子どもたちは小さな声で「君が代」を歌いながら、そしてまた一方で「私たち、なぜ死ぬるの？ 私たちは、何も悪いことしていない」という、悲痛でいたましい叫び声をあげながら息を引き取っていった子どもたち……。そう、たしかに君たち子どもは、本当に何もしていないのだ。戦争中の不自由さとひもじさと苦しみだけの毎日のあとに、こうして苦しんで死んでいかねばならないというのは、いったいどういうことなのか？ 私は死んでいく子どもたちがただただ哀れで、何とも言葉がなかった。



麻酔なしで少女の左手を切断 (小原画)

この子どもたちを死なせたのは、われわれ大人の責任である。戦争を止めることも、また戦争を防ぐこともできなかったのは、大人たちの責任なのだ。死ぬ間際まで、「君が代」を歌いながら死んでいった子どもたちを作ってきた教育の責任も、われわれ大人にある。

いま私は、戦争の恐怖と無意味さを、若い人たちにはっきり具体的に知ってほしいと思う。それが、戦争体験を継承するということの本当の意味だという気がする。

(同書、95-97頁)

ここで李公殿下のことも書いておきたい。李殿下というのは、広島市の平和記念公園の

外に立つ「韓国人の碑」の銘文に出てくるのだが、当時朝鮮は日本に併合されていて、朝鮮の王族のひとりである李殿下は中国第二総軍参謀として広島で被爆死している。

一九八〇年五月に山口県の下関での五三会の集まりの時、西村隊長が私と海を眺めながら、「今日まで一度も話したことはないが」と言って、二〇年八月六日、高貴な方（＝李殿下）を将校宿舎（服部中尉）に収容したこと、八月八日～九日にかけて死亡され、死後の処置もしたこと、中国軍総司令官畑俊六中將がたびたび見舞いに来られ、李殿下が亡くなった後、遺体をそのまま朝鮮に飛行機で送ったことなどを、ポツンと話された。

（後に、中国放送がこのことを取材した時、西村隊長はテレビ局制作部の質問に答えて、手紙を書いている。その中で西村隊長は、李殿下の死後処置の最中に、殿下の副官の吉成中佐が、原爆被災時に李殿下のお供をしていなかった責任をとって自決したということである。吉成中佐はその直前に感冒にかかって、李殿下と一緒にいなかったとのことである。）

（同書、100頁）

【参考】韓国人原爆犠牲者慰霊碑（1970年建立。1999年、平和記念公園内に移設）

建立の目的：強制労働等により広島で被爆した同胞の慰霊と、再び原爆の惨事を繰り返さないことを願うため。

碑文（裏面）日本語訳

「悠久な歴史を通じて、わが韓民族は他民族のものをむさぼろうとしなかったし、他民族を侵略しようとはしませんでした。（中略）しかし、5千年の長い民族の歴史を通じて、ここにまつた2万余位の霊が受けたような、悲しくも痛ましいことはかつてありませんでした。韓民族が国のない悲しみを骨の髄まで味わったものが、この太平洋戦を通してであり、その中でも頂点をなしたのが原爆投下の悲劇でありました。…」

→ 尹東柱・序詩「すべて 死にゆくものたちを愛しまねば」（後述）



## 2) 研究の対象としての戦争

・ユダヤ教・キリスト教・イスラームといった一神教世界および近現代日本における戦争の研究を自分自身の研究の一部としてきた。

【参考】小原克博『一神教とは何か——キリスト教、ユダヤ教、イスラームを知るために』平凡社新書、2018年。小原克博『宗教のポリティクス——日本社会と一神教世界の邂逅』晃洋書房、2010年。堀江宗正編『宗教と社会の戦後史』東京大学出版会、2019年（執筆分担：小原克博「キリスト教と日本社会の間の葛藤と共鳴——宗教的マイノリティが担う平和主義」）。

・ドイツ留学（1989～91年）がきっかけとなり、ドイツと日本の戦争責任理解に関する比較研究やそれに基づく授業を行ってきた。「記憶を伝えるには、多くの人がある記憶を共有する文化を育て、さらに普遍性をもつ、より大きな記憶の文化に育て上げることが肝心だ」

(岡裕人『忘却に抵抗するドイツ——歴史教育から「記憶の文化」へ』大月書店、2012年139頁)。

### 3) 戦争・亡国と詩

聖書では詩や歌を通じて祖国を想起している。以下は詩編からの一例。新バビロニアによって祖国から引き離され、バビロニアに捕囚されたユダヤ人たちがバビロン川のほとりで自分たちが受けた屈辱を悲嘆している詩。

バビロンの流れのほとりに座り  
シオンを思って、わたしたちは泣いた。  
豎琴は、ほとりの柳の木々に掛けた。  
わたしたちを捕囚にした民が  
歌をうたえと言うから  
わたしたちを嘲<sup>あざけ</sup>る民が、楽しもうとして  
「歌って聞かせよ、シオンの歌を」と言うから。  
どうして歌うことができようか  
主のための歌を、異教の地で。  
(旧約聖書「詩編」137:1-4)

## 4. 尹東柱の詩

### 1) 詩のダイナミズムと文学手法

#### ・メタファー (隠喩)

よりよく(深く)理解するために、あるもの(既知のもの)で別のもの(未知のもの)を表現する。すぐれたメタファーは、凝固し、凍結した惰性的な意味を活性化し、意味の再配置を行う。例:「人生は旅」。「目からうろこ」(新約聖書「使徒言行録」9:18-19)。イエスのたとえ話(神の国は~のようなものである)。

#### ・メトニミー (換喩)

メトニミーは、ものとももの隣接関係に注目する。例:「ハリウッド」が映画産業を指す。

「空の鳥をよく見なさい。……野の花がどのように育つのか、注意して見なさい」(マタイ6:26,28)において、イエスは「空の鳥」と「野の花」に聴く者の意識と知覚を向けさせている。それは映画のクローズアップの手法にも似たものであるが、日常において漠然とわかっているながら見過ごしていた事物の細部へと目を向けさせることによって、かえって、その背後にある世界や、それを支える全体を印象的に際立たせている。ここでは小さなもの、はかないものの代表として取り上げられた「空の鳥」と「野の花」が、逆説的に、命あるものすべてを庇護している神の恵みの絶対性・全体性を指示している。

「だから、言うておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。あなたがたのうちだれが、思ひ悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。なぜ、衣服のことで思ひ悩むのか。野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、言うておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか、信仰の薄い者たちよ。だから、『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と云って、思ひ悩むな。それはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。だから、明日のことまで思ひ悩むな。明日のことは明日自らが思ひ悩む。その日の苦勞は、その日だけで十分である。」(新約聖書「マタイによる福音書」6:25-34)

小さなもの(出来事)の中に働く大きな力(愛)を聖書は語り、常識をひっくり返すような、驚きに満ちたイエスの言葉やエピソードが聖書には多数記されている。同様の繊細かつ革新的な精神が尹東柱の詩の中にも見られる。

## 2) 尹東柱の詩から

### 自画像

麓の隅<sup>すみ</sup>を廻り ひそまった田のかたわらの 井戸をひとり訪ねては  
そおっと覗いて見ます。

井戸の中には 月が明るく 雲が流れ 空が広がり  
青い風が吹いて 秋があります。

そしてひとりの 男がいます。  
どうしてかその男が憎くなり 帰っていきます。

帰りながら考えると その男が哀れになります。  
引き返して覗くと その男はそのまいます。

またもやその男が憎くなり 帰っていきます。  
道すがら考えると その男がいとおしくなります。

井戸の中には 月が明るく 雲が流れ 空が広がり  
青い風が吹いて 秋があつて  
追憶のように 男がいます。

(一九三九・九)

(『伊東柱詩集 空と風と星と詩』金時鐘<sup>シジョン</sup>編訳、岩波文庫、2012年、10-11頁)

### 十字架

ついてきていた日射しだったのに  
いま 教会堂のてっぺんの尖<sup>さき</sup>の  
十字架にひっかかりました。

尖塔があのようにも高いのに  
どうすれば登っていけるのですか。

鐘の音も聞こえてはこないのに  
口笛でも吹きつつほっつき歩いて、

苛<sup>さいな</sup>まされた男、  
祝福されたイエス・キリストへの  
ように  
十字架が許されるならば

首<sup>こうべ</sup>をもたげて  
花のように咲きだす血を  
陰ってゆく空の下で  
しずかに垂らしています。

(一九四一・五・三一)

(同書、23-24頁)

### 序 詩

死ぬ日まで天を仰ぎ  
一点の恥じ入ることもないことを、  
葉あいにおきる風にさえ  
私は思い煩った。  
星を歌う心で

すべての絶え入るものをいとおしまねば  
そして私に与えられた道を  
歩いていかねば。

今夜も星が 風にかすれて泣いている。

(一九四一・一一・二〇)

(同書、9頁)

死ぬ日まで 天<sup>そら</sup>を仰ぎ  
一点の恥ずることなきを、  
葉あいを 縫いそよぐ風にも  
わたしは 心痛めた。  
星を うたう心で  
すべて 死にゆくものたちを愛<sup>いと</sup>しまねば  
そして わたしに与えられた道を  
歩みゆかねば。  
今宵も 星が 風に——おせび泣く。

(伊東柱詩碑建立委員会編『星うたう詩人——伊東柱の詩と研究』三五館、1997年、  
13頁)

### たやすく書かれた詩

窓の外で夜の雨がささやき  
六畳の部屋は よその国、

詩人とは悲しい天命だと知りつつも  
一行の詩でも記してみるか、

汗の匂いと 愛の香りが ほのぬくく漂う  
送ってくださった学費封筒を受け取り

大学ノートを小脇にかかえて  
老いた教授の講義を聴きにゆく。

思い返せば 幼い日の友ら  
ひとり、ふたり、みな失くしてしまい

私はなにを望んで  
私はただ、ひとり澱<sup>おり</sup>のように沈んでいるのだろうか？

人生は生きがたいものだというのに  
詩がこれほどもたやすく書けるのは  
恥ずかしいことだ。

六畳の部屋は よその国  
窓の外で 夜の雨がささやいているが、

灯あかりをつよめて 暗がりを少し押しやり、  
時代のようにくるであろう朝を待つ 最後の私、

私は私に小さな手を差しだし  
涙と慰めを込めて握る 最初の握手。

(一九四二・六・三)

(同書、42-44 頁)

### 3) 詩と政治・歴史——不条理への対向

#### ・尹東柱の詩の政治性

たしかに尹東柱の詩作品は、時節や時代の状況からははずれているノンポリの作品です。ですがその時、その場で息づいていた人たちと、それを書いている人との言いようのない悲しみやいとおしさ、やさしさが体温を伴って沁みてくる作品ばかりです。それはそのまま詩人が生きていた時代の日の射さない、暗がりの素顔を浮かび上がらせている意志的な反証ともなっているものです。あの極限の軍国主義時代、こぞって戦争賛美や皇威発揚になだれを打っていた時代、同調する気配の微塵もない詩を、それも差し止められている言葉でこつこつと書いていたということは、逆にすぐれて政治的なことであり、植民地統治を強いている側に通じる言葉を自ら断つ、反皇国臣民的行為の決意をともなっていたものです。ですので尹東柱の詩は、時節とは無縁の心情のやさしい詩であつたがために、治安維持法に抵触するだけの必然を却ってかかえていた詩でもあつたのでした。

(金時鐘「解説に代えて——尹東柱・生と詩の光芒」、同書、163 頁)

#### ・東日本大震災(2011年3月11日)の被災者のために書かれた李承信イスンシンの詩

尹東柱の詩碑建立(除幕式)の直前、阪神・淡路大震災が起こった(1995年1月17日)。植民地支配や戦争は国家によって引き起こされ、自然災害は地震・津波・大雨等の自然の力によって引き起こされるという点で両者の原因や背景は異なるが、無辜の人々が犠牲となり、筆舌に尽くしがたい不条理を含む点で両者には共通するものがある。詩は不条理の中にある人々の悲嘆に向かう。



## 平和

辛い歴史をすべて忘れられないにしても

心の<sup>おり</sup>澱を降ろし

成熟した平和を祈る

(李承信『君の心で花は咲く——隣人・被災地の友に贈る 192 の詩』飛鳥新社、2012年、143頁)

## 関係

痛みの歴史があるゆえに

あなたの痛みを抱きしめることができる

新たに芽吹く私たちの関係

(同書、145頁)

## 5. 尹東柱と良心

### 1) 尹東柱が生きた時代

1940年、良心碑が建立。同志社は1935年以降、軍部の介入などを受け、混乱と苦難の時代に突入していた。尹東柱は同志社在学中、あたかも「良心の自由」を探るかの如く、ハンブルグでの詩作活動を続けた。

ここでは儒教的な良心ではなく、抵抗の思想的根拠としての良心 (conscience) を探る。

【参考】(講演) 小原克博「戦争と同志社——キリスト教主義学校の苦悩と教訓 (1930~1945年)」、同志社大学 良心学研究センター主催 連続シンポジウム「同志社150年の歴史から展望する未来への挑戦」第4回、2024年12月20日 (<https://ryoshin.doshisha.ac.jp/jp/activity/20241220/>)



### 2) 国家への従順か、反逆か——緊張の中から見える「良心」(conscience)

明治期以降の、とりわけ、戦争の時代の本質的な問いは「国家への従順か、反逆か」であった。しかし、これは近代日本に限定された問いではなく、普遍的な歴史的広がりを持っている。ここでは、その一例として「良心の宗教」としての出自を持つプロテスタントイズム(広くはキリスト教)を取り上げる。

ここでの「良心」は秩序への順応を求める儒教的「良心」ではなく、自立した個人の深い信念に根ざし、秩序に抗うこともある「良心」(conscience) (例: 良心的兵役拒否) であることに注意。

#### ・ヴォルムスの帝国議会(1521)でのルターの答弁

教会や公会議はしばしば過ちを犯した。だから聖書の根拠、または明白な理性によって納得させられない限り、良心に依然として証拠を確信している。私の良心は神の言葉に縛られている。良心に逆らって行動することは確実ではないし正しくもない。それゆえ

私は何事も取り消すことはできないし、また、そうしようとは思わない。私はここに立つ。私に他の在り方はない。

・新約聖書

そこで、パウロは最高法院の議員たちを見つめて言った。「兄弟たち、わたしは今日に至るまで、あくまでも良心に従って神の前で生きてきました。」(使徒言行録 23:1)

・金芝河「良心宣言」(1975) (※抵抗詩人・金芝河はカトリック信徒)

自由と平和を愛する、全世界の良心ある隣人たちは、われわれの孤独な、苦難にみちたたたかきに惜しみない支援をよせてくれるだろう。この時代にもっとも必要なものは、真実、そしてそれを愛するがゆえにたえなくてはならない受難にたいする情熱である。

人間の自由と解放のために、全民衆が渴望し待ちあぐんでいる、民主主義の勝利のために、われわれのすべてのものをささげようと私はいいたい。

われらすべての健闘のために、私は今日も祈っている。

一九七五年五月

金芝河

(金芝河他『良心宣言』井出愚樹編訳、大月書店、1975年、44頁)

## 6. おわりに——尹東柱に対する同志社大学名誉文化博士の学位の贈呈

今も、韓国から多くの高校生や観光客が絶えることなく同志社大学の尹東柱詩碑を訪ねている。その一方で、本学の学生たちの多くは尹東柱のことを知っているわけではない。こうした現状の中、2025年2月16日、尹東柱の没後80年・詩碑建立30周年を迎え、また、同志社は2025年に150周年を迎えるにあたり、尹東柱に対し同志社大学名誉文化博士の学位を贈呈することを2014年12月に決定した。本学にとって、故人に対する名誉学位贈呈は前例のないことであつたため、反対意見も少なからずあつたが、議論を重ねる中で、その歴史的意義を理解していただけたのではないかと考えている。

同志社の歴史の中には戦争の時代があり、多くの学生がその時代の犠牲者となったことを忘れることはできない。2025年、日本社会が戦後80年を振り返る中で、また、日韓国交正常化60周年を記念する中で、本学はその歴史の中に尹東柱がいたことを記憶し、一人の学生の命を守ることができなかったことを歴史の教訓として心に刻みながら、これからの新しい時代を拓いていきたい。

### 【参考文献】 尹東柱に関する比較的入手しやすい日本語文献

宇治郷毅『詩人尹東柱への旅——私の韓国・朝鮮研究ノート』緑蔭書房、2002年。

日本基督教団出版局編『新版 死ぬ日まで天を仰ぎ——キリスト者詩人・尹東柱』日本基督教団出版局、2005年。

尹東柱詩碑建立委員会編『星うたう詩人——尹東柱の詩と研究』三五館、1997年。